

令和元年6月13日現在

機関番号：17301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2018

課題番号：24730555

研究課題名(和文) 幼児期における情動調整の発達と保育者のかかわり：関与観察での質的アプローチ

研究課題名(英文) Teachers' Support to Development of Emotion Regulation in Young Children

研究代表者

森野 美央 (MORINO, Miwo)

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号：00413659

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、幼児期における情動調整の発達の变化に保育者がどのような役割を果たしているかを明らかにするものであった。先行研究をふまえ、年少から小1までの縦断的関与観察(対象と共にありながら観察)を行った結果、保育者は、積極的に子どもの情動を調整する「代行役」をする一方、子ども自身が主となる情動調整のきっかけづくりをする「黒子役」もしながら、自律的な情動調整の発達を促していること、一方、小学校では、決まりや評価といった基準に照らし合わせる形で情動調整が求められる場面が増え、幼児期とはかかわりの様相が異なる可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義、社会的意義は下記の3点に集約される。1.近年、社会的にも学術的にも検討ニーズが高まっている情動調整を取り上げた点。2.情動調整研究の中で、検討が必要であるにもかかわらず知見が少ない、「幼児期における情動調整の発達の变化に保育者がどのような役割を果たしているか」を長期にわたって検討し、小学校との比較も行った点。3.2.の検討の際、情動をOn timeで捉える工夫をし、ネガティブ情動に加えてポジティブ情動も検討対象とし、感情発達研究に質的知見を提供した点。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to investigate how teachers at kindergarten socialize children's emotion. After reviewing prior research, longitudinal observations were conducted on interactions between children and teachers during daily morning assembly at kindergarten and school hours at elementary school. Observation was made from the standpoint of moderate participation. The results indicate that (1) There is a possibility that teachers at kindergarten stimulate autonomous emotion regulation while taking a role as "a stage hand" in the creation of opportunities for emotion regulation by children themselves. On the other hand, they act also assertively as "an agent" who regulates children's emotions, (2) At elementary school teachers sometimes require children to regulate their emotions according to school rules and evaluation code. Teachers' role in the development of emotion regulation at kindergarten and the one at elementary school were different.

研究分野：保育学 発達心理学

キーワード：情動調整 保育者 幼児期

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

「情動調整」とは、日常経験する様々な情動（怒りや悲しみなど）について、自身または他者のサポートを得て表出程度の増減、維持をすることを指す（Gross, 2008 をもとに定義）。情動調整は、保育・教育現場で自分の情動をコントロールできない「キレる子」への対応が模索されている現状から社会的ニーズの高い検討課題となっており、また、感情発達研究においても、感情が適応の観点で捉えられるようになったことから新たな地位を得ているテーマである。

情動調整と関連し、感情発達研究の中で古くから取り組まれてきたテーマに、感情理解がある。筆者は、幼児期における感情理解の研究を約 10 年行ってきた。その研究結果と先行研究の知見とを合わせ、図 1 の発達過程がみられるのではないかと捉えている（森野, 2010）。感情理解の発達は、状況に応じて情動の量や質を調整する力の基礎になっていることが予想される。たとえば、感情表出の結果や影響を理解し始めた 5 歳から 6 歳頃にかけて、自身に強い怒りが生じたとき、怒りがもつ関係破壊的な影響を考慮して、量や質を変化させようとする姿がみられるかもしれない。これまでの研究で得てきた発達過程の知見や経験を活かし、近年、社会的にも学術的にも検討ニーズが高まっている情動調整を取り上げ、特に幼児期に情動を調整する力がどのように発達するかを検討したいと考えた。

幼児期における情動調整の発達には、養育者をはじめ、大人とのやりとりが徒弟的役割を果たすことが予想される。特に、多くの幼児が通い、日々緊迫した情動がぶつかりあう保育現場にいる保育者は、情動調整の発達に影響する重要なかわりをしている可能性がある。幼児期のかかわりは、即座に効果が出るというより、日々の保育の蓄積が数カ月後や 1、2 年後に滲み出てくる場合が多い。しかしながら、保育者のかかわりを長期にわたって検討した研究は、ほとんど見当たらないため、本研究によって、保育者が情動調整の発達に果たす徒弟的役割を長期的視野に立って明らかにしたい。これが本研究開始の一つ目の動機であった。

また、感情理解の研究を続けるうちに、従来の研究方法への限界を感じるようになった。具体的には、実験室で架空の物語を聞いて自他の感情を推測したり、日常の感情をふり返ってインタビューに答えたり、という従来型のアプローチ方法をとると、感情ではないものを対象としている感じがするようになったのである。氏家 (2010) が指摘するように、感情発達研究は、生々しい感情を対象としているにもかかわらず、それを On time で捉えた検討が十分ではない。よく取り上げられるネガティブ情動（怒り、悲しみ、嫌悪など）のみではなく、ポジティブ情動（安心、喜び、興奮など）も対象として、感情発達研究に On time の質的知見を提供したい。これが本研究開始の二つ目の動機であった。

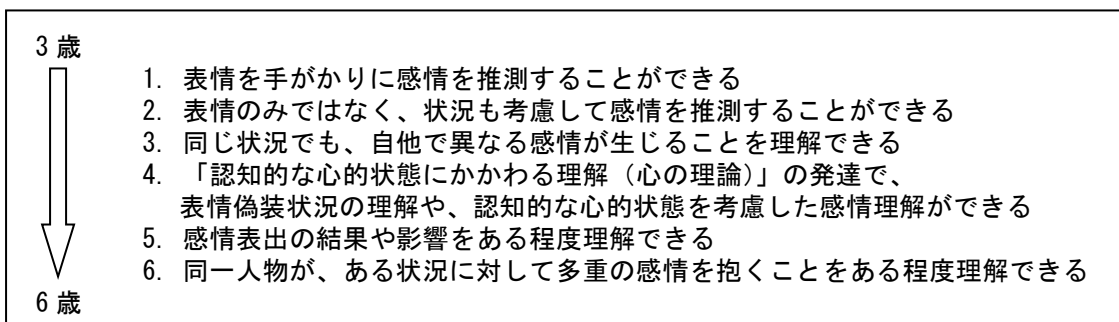


図 1 幼児期における感情理解の発達過程（森野, 2010 より作成）

### 2. 研究の目的

本研究では、幼児期における情動調整の発達の变化に、保育者がどのような役割を果たしているかを明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 先行研究レビュー

従来の研究の中で本研究の位置付けを明確にする目的で、乳幼児期における情動調整研究の知見を整理した。

#### (2) 縦断的関与観察

情動を On Time で捉え、保育者が情動調整の発達に果たす役割を長期的視野から明らかにするために、年少児から年長児までの 3 年間、縦断的関与観察（対象と共にありながら観察を行う）を行った。また、保育者の役割をより明確にする目的で、対象児が小学校へ進学した後の観察も行った。

観察場面と観察の内容：本研究実施前の予備的検討として、幼児の情動調整に保育者がかかわっている場面を約 1 年間観察し、その発達の变化に保育者が果たす役割について、どの部分をどのようにどこまで明らかにするかを吟味し、下記 2 点に絞った。

#### ① 「お集まり場面」での情動調整は、3 年間でどのように変化するか？【基礎的研究】

情動を On time で捉えるために適した場面を検討した結果、「お集まり場面」を取り上げることにした。「お集まり場面」は、情動調整を最初から最後まで観察でき、他の場面よりも前後

の文脈と場の雰囲気をつかみやすかったからである。小学校での観察は、類似のやりとりが観察可能な場面として「授業場面」を対象とした。

②情動調整不足児や過剰児への個別の情動調整と児の発達との関連は？【臨床応用的研究】

情動調整には、調整の仕方によって3つのタイプが報告されている。生の情動がそのまま行動に出てしまう「調整不足タイプ」、情動を調整しすぎる「調整過剰タイプ」、程良い調整ができる「適度な調整タイプ」である。こうしたタイプは、保育者のかかわりによって変化する可能性が指摘されている(久保, 2010)。①の基礎的研究は、集団全体に対する情動調整の変化を調べていくものであるが、これだけでは、一人ひとりの情動調整の発達と保育者のかかわりとの関連を十分に捉えられない。予備的検討の際、「お集まり場面」で保育者が情動調整不足児や過剰児に個別の言葉かけをしたり、身体接触をしたりする光景があった。集団全体への情動調整のみではなく、個別のかかわりについてケース研究という形で取り上げ、発達との関連を検討することにした。

手続き：園には、休み期間を除き、基本的に月2~4回のペースで通い、同年齢2クラスの朝のお集まり場面を、可能な範囲で交互に観察するようにした。調査開始前の手続きとして、園の教職員と保護者には、事前に長期の研究について協力を依頼して承諾を得た。子どもたちには、観察でクラスへ入る際に入室の可否を尋ね、了承を得てから入室した。長期の研究かつ関与観察であったため、朝のお集まり時間以外の時間で一緒に遊んだり、会話をしたりして信頼関係の構築と「共にある人となること」を目指した。観察終了後、担任の先生と話す時間がとれた場合は、観察日より前の子どもの様子や、当日のお集まりでの言葉かけの意図を尋ねた。また、年2~3回の報告会を行い、観察結果についてコメントをいただき、相互にメリットが出るようにした。記録には、ICレコーダー、ビデオカメラ、フィールドメモを使用した。小学校では、校長先生との事前協議にて、基本的に月1~2回のペースでの授業場面観察(同一日に2クラス観察)、子どもたちには調査開始前に長期の観察の可否を尋ねることになった以外は、園と同様の手続きであった。

フィールドの概要：園と小学校の特定を防ぐ目的で、本報告書全体を通して詳細は割愛するが、幼稚園教育要領に沿って日々の保育が行われている園、小学校学習指導要領に沿って日々の教育が行われている小学校を対象とした。各年齢とも2クラスで、クラスの人数は、年齢やクラスによって異なり、最も少ない時で11名、多い時で28名であった。

4. 研究成果

2012年度に縦断的関与観察の準備を進めていたが、産前産後休暇・育児休業が入る可能性が高くなり準備を中断、縦断的関与観察は2015年度のスタートとなった。実際に行った研究内容とスケジュールは図2の通りであり、申請当初予定していた内容に、小1時の観察が加わった。以下、(1)先行研究レビュー、(2)縦断的関与観察の順に主な成果を報告する。

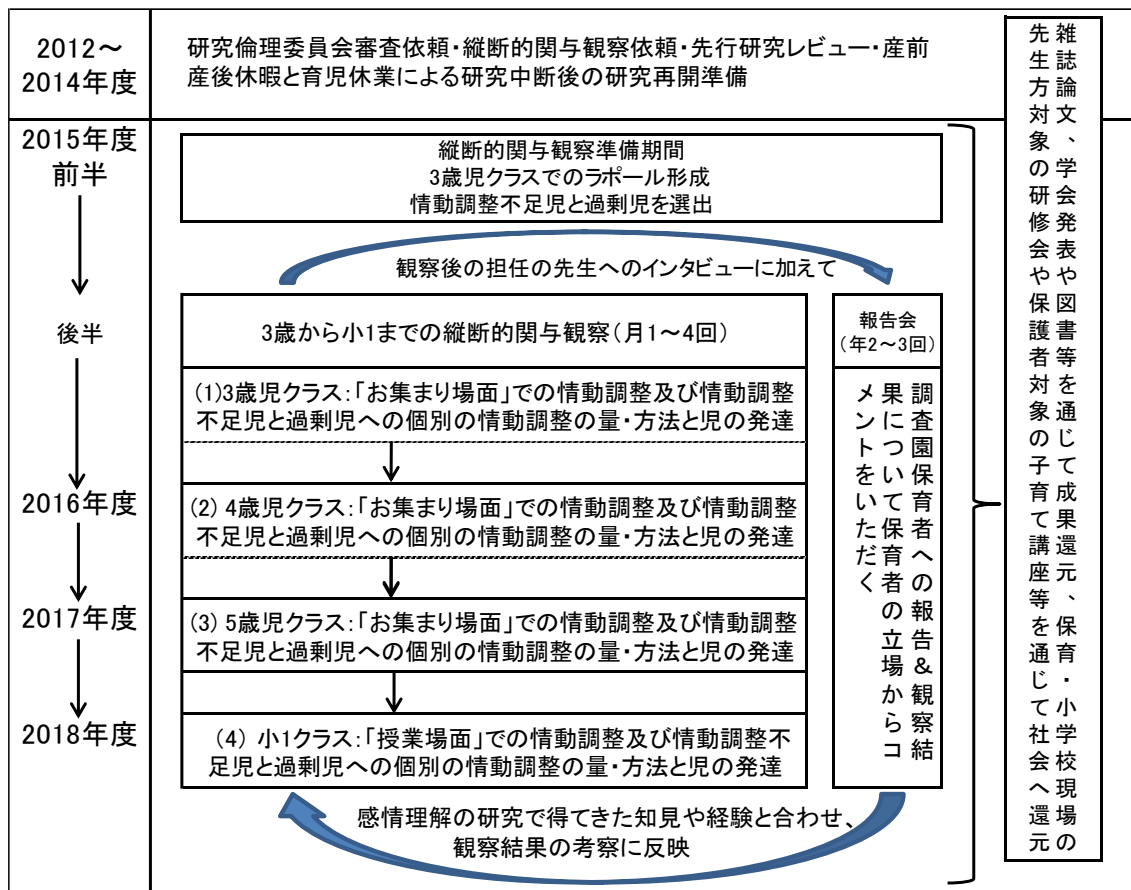


図2 実施した研究内容とスケジュール

(1) 先行研究レビュー

まず、情動調整とは何かを整理した。その結果、情動調整は、プロセスとして捉える必要があること、成人を対象とした研究の場合、主として自身によって調整がなされる「内在的情動調整」のプロセスに焦点があてられるが、発達研究になると、他者がかかわる「外在的情動調整」のプロセスについても焦点が多くあてられていることが明らかにされた。また、発達研究の観点が含まれたプロセスモデル (Gross & Thompson, 2007) が提唱されていることも分かった。

次に、情動調整の発達について検討した研究を概観し、情動調整の標準的発達は次のような道筋をたどるのではないかと推測された。①乳児期は、主として養育者に負う外在的情動調整が多く見られるが、その後認知的側面の発達につれて徐々に内在的情動調整が増え始め、②幼児期に入ると、外在的情動調整と内在的情動調整が混在する状態を経て、次第に独力で情動を調整する内在的情動調整が多くなる。また、この時期には、量的側面の変化のみならず、主として自動化された情動調整から意識化された情動調整へと質的変容も見られる。③児童期以降になると、適応の観点から外在的情動調整を必要とする者が見られる程度となる。標準的発達において著しい変化が見られるのは、幼児期前期から児童期初期、外在的情動調整から内在的情動調整へと調整の主体が切り替えられる過渡期の時期ではないかと考えられた。

続いて、「外在的情動調整から内在的情動調整へと移り変わる過渡期において、大人はどのような徒弟的役割を果たしているのか」という問いに答えるため、過渡期の発達を促す大人の役割について、家庭における養育者のかかわり、そして、保育所や幼稚園における保育者のかかわりに分け、現在出されている知見をまとめた。その結果、家庭において、乳幼児の親は、葛藤場面で子ども側に生じるネガティブ情動が強い場合は、外在的情動調整を積極的に行うが、子どもが主体的に情動調整を行おうとしている場合は、それを見守りつつ、必要に応じてサポートをしたり、情動調整の方法について言葉を介して伝えたりしながら、子どもの情動調整の発達、さらにはその後の心身発達を支える役割を担っていることが明らかにされた。また、児童の親は、幼児期のように積極的に徒弟的役割を担う存在というよりも、子どもが必要とする時のみ役割を担う存在となっている可能性が指摘された。

一方、情動調整の発達に養育者が果たす役割を検討した研究に比べると、保育者が果たす役割を検討した研究は数少ないことが分かった。そこで、情動調整を直接取り上げた研究以外の研究も含めて、情動調整の発達に保育者が果たす役割が示唆されている論文を概観した結果、保育者は、親と同じように、幼児期には発達に応じてかかわり方を変えており、幼児期前期には保育者自身が積極的に情動調整へかかわる必要性を感じた時にはかかわるが、徐々に幼児が主体的に情動調整を行うことができるよう、情動調整の方法について言葉を介して伝えながら情動調整の発達を支えている可能性が推測された。そして、幼児は、こうしたかかわりを通して情動調整に関する学びを深め、外在的情動調整から内在的情動調整へと主体的に情動調整を行う方向へ進む足がかりを得ている可能性が指摘された。

最後に、乳幼児の情動調整に関する展望を3点にまとめた。(i) 保育の専門家である保育者が情動調整の発達に果たす役割を検討することで、過渡期における情動調整の発達を理解・支援する手がかりがつかめ、子育て支援にもつながるのではないかと、(ii) 情動調整と情動にかかわる理解との関連を検討することで、情動調整の発達に関する知見を広げられるのではないかと、(iii) 情動調整を検討する際、ポジティブな情動調整にも着目することによって、これまであまり焦点があてられてこなかった、「今ここ」をより豊かにする情動調整という、新たな視点が提供できるのではないかと。

以上のように、先行研究のレビューを行ったことで、本研究の位置付けを明確にすることができた。

(2) 縦断的関与観察

① 「お集まり場面」での情動調整は、3年間でどのように変化するか？【基礎的研究】

	<p>3 歳</p> <p>感情理解の発達過程</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 表情を手がかりに感情を推測することができる</li> <li>2. 表情のみではなく、状況も考慮して感情を推測することができる</li> <li>3. 同じ状況でも、自他で異なる感情が生じることを理解できる</li> <li>4. 「認知的な心的状態にかかわる理解 (心の理論)」の発達で、表情偽装状況の理解や、認知的な心的状態を考慮した感情理解ができる</li> <li>5. 感情表出の結果や影響をある程度理解できる</li> <li>6. 同一人物が、ある状況に対して多重の感情を抱くことをある程度理解できる</li> </ol> <p>6 歳</p>	<p>特徴的な保育者のかかわり</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ポジ・ネガ様々な情動を初めて経験する機会の提供と情動調整への積極的なかかわり</li> <li>2. 自身の情動への気づきを促すかかわりや、自身の情動表出が他者へ与える影響について伝えるかかわり</li> <li>3. 自身や他者の情動に気づき、言葉にしたり、情動調整をしようとする姿を認めたり励ましたりするかかわり</li> <li>4. 自他より良い状態を目指しての情動調整を促すかかわり</li> </ol>
--	---	---

図3 感情理解の発達過程と各時期の「お集まり場面」における、特徴的な保育者のかかわり

図3は、感情理解の発達過程と各時期の「お集まり場面」において、特徴的と捉えられた保育者のかかわりをまとめたものである。本研究の最終年度に、小学校での観察が入った関係で、全てのデータをもとにした、集団全体への情動調整にかかわる詳細な比較はこれからであるが、現段階では、幼児期の3年間よりも、園と小学校での情動調整との間に大きな変化があるのではないかということ捉えている。具体的には、幼児期は、保育者が児の自律的な情動調整の発達を念頭に置いていることが伝わる情動調整場面が多く見られたが、小学校1年時は、決まりや評価といった外側にある基準が提示され、それに照らし合わせる形で情動調整が求められる場面が増えており、幼児期と質的に異なるかかわりがなされている可能性が考えられた。

②情動調整不足児や過剰児への個別の情動調整と児の発達との関連は？【臨床応用的研究】

情動の浮き沈みが激しく、人の話をきくことが難しい男児（B1）と、情動の浮き沈みが日によって異なり、集団の中で自分を出すことが難しい女児（G2）を対象児とし、各児の情動調整へ、保育者がどのようにかかわっているかを観察した。

分析の際は、記録データ、逐語録、およびフィールドメモをもとに、B1、G2の子どもの情動へ保育者が関与し、調整をした場面を1エピソードとした。ただし、関与する中で子ども側が別の情動を表出し、更に保育者が関与した際は別のエピソードとしてカウントした。なお、情動の種類や情動調整の内容は、子どもや保育者の表情、声の抑揚、身振り、発言内容や前後の文脈を手がかりに判断した。

【保育者はどの情動をどのくらい調整しているか】B1とG2が同じクラスに在籍した3歳時のエピソードについて比較した結果を表1に示す。保育者は、共通して、ネガティブ情動よりもポジティブ情動の調整に多くかかわっていた。また、エピソード数は、B1が40、G2が12であり、保育者は、B1の情動調整にG2の約3倍関与していた。

表1 お集まり場面で保育者が関与した情動

		B1	G2
ポジティブ	興奮	42.5%(17)	25.0%(3)
	喜び	20.0%(8)	33.3%(4)
	誇り	-	8.3%(1)
	安心	-	-
ニュートラル		5.0%(2)	8.3%(1)
ネガティブ	照れ	2.5%(1)	8.3%(1)
	気まずさ	2.5%(1)	-
	後悔	2.5%(1)	-
	嫌悪	12.5%(5)	16.7%(2)
	悲しみ	2.5%(1)	-
	恐れ	5.0%(2)	-
	怒り	5.0%(2)	-

【保育者はどのように情動調整を行っているか】B1とG2の情動へ保育者が関与した場面において、情動調整のプロセスモデル（Gross & Thompson, 2007）の中のどの方法がどのような形で用いられているかを分析した。その結果、特に状況変容<sup>1)</sup>と反応調節<sup>2)</sup>において、保育者が主となり、積極的に子どもの情動を調整しようとするかかわりとは別に、幼児自身での情動調整へつながる可能性があるかかわりが観察された。具体的には、子どもが自身の情動と向き合えるようなきっかけを作り、自身主体での情動調整を促すかかわり方である。それぞれのかかわりは、情動調整の発達という観点からすると、異なる役割を果たしている可能性があり、情動調整のプロセスモデルを精緻化する必要性が指摘された。

<sup>1)</sup> 情動反応を生じさせている状況そのものを変えようとする保育者のかかわり（例：問題が解決せずネガティブ情動が生じている場面において、問題の元となっているものを除去するなどして表出された情動の種類や強さを変えようとするかかわり）

<sup>2)</sup> 情動反応へ直にかかわり、直に調整するような保育者のかかわり（子どもが示した情動の種類や強さと異なる種類の情動や強さの情動でかかわることによって、表出された情動の種類や強さを変えようとするかかわり）

(3) 結論および今後の課題

幼児期における情動調整の発達の变化に保育者がどのような役割を果たしているかを明らかにするため、先行研究を概観して本研究の位置付けを明確にした後、年少から小1までの縦断的関与観察を行った。その結果、保育者は、積極的に子どもの情動を調整する「代行役」をす

る一方、子ども自身が主となる情動調整のきっかけづくりをする「黒子役」もしながら、自律的な情動調整の発達を促していること、一方、小学校では、決まりや評価といった基準に照らし合わせる形で情動調整が求められる場面が増え、幼児期とはかかわりの様相が異なる可能性が示唆された。

保育者のかかわりも、小学校教諭のかかわりも、場面の特徴やその場面において保育者と小学校教諭が何を重視しているか、更には子ども側の情動調整の特徴によって異なる可能性が把握できたため、今後は、本研究をふまえて更に詳細な検討を進め、幼小接続期にかかわる提言へとつなげていく予定である。

#### <引用文献>

- Gross, J.J. 2008 Emotion regulation. In M. Lewis, J. M. Haviland-Jones, & L. F. Barrett (Eds.), *Handbook of Emotions* (3rd ed.). New York: Guilford Press. pp. 497-512.
- Gross, J.J., & Thompson, R.A. 2007 Emotion regulation: Conceptual foundations. In J.J. Gross (Ed.), *Handbook of Emotion Regulation*. New York: Guilford Press. pp. 3-24.
- 久保ゆかり 2010 幼児期における情動調整の発達 心理学評論, 53, 6-19.
- 森野美央 2010 幼児期における感情理解 心理学評論, 53, 20-32.
- 氏家達夫 2010 発達研究が捉える感情は生ぬるくなってしまったのか? : 久保氏、森野氏、坂上氏の論文に対するコメント 心理学評論, 53, 56-61.

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計7件)

- (1) 森野美央 2014 子どもの情動調整にかかわる大人の理解と対応 【査読あり(依頼論文、依頼者による査読あり)】 教育と医学(慶應義塾大学出版会), 62(11), 12-21.
- (2) 森野美央 2013 乳幼児期における情動調整研究の動向と展望 【査読あり(学内)】 比治山大学現代文化学部紀要(2012年度版), 19, 107-116.

[学会発表] (計8件)

- (1) Miwo Morino 2019 Teachers' Support to the Development of Emotion Regulation: To enable smooth transition from kindergarten to elementary school education. Pacific Early Childhood Education Research Association 2019.
- (2) Miwo Morino 2016 Teachers' Support to the Development of Emotion Regulation: A Case Study of 3-year-old Children at Kindergarten. 31st International Congress of Psychology.

[図書] (計7件)

- (1) 柏崎秀子・森野美央・道又紀子・宮脇 郁・伊藤崇道・三宮真智子・本多潤子・長崎 勤・仲野真史 2019 新版 発達・学習の心理学(第3章 幼児期の発達) 北樹出版, pp.30~41, 総ページ数 200 ページ
- (2) 渡辺千歳・矢野由佳子・井梅由美子・須田 誠・森野美央・東山 薫・坪井寿子・山川賀世子・五味美奈子・藤本昌樹・高田伸枝・福田真奈・上村宏樹・塚原拓馬 2017 はじめて 学ぶ発達心理学: 乳幼児を中心に(第5章 自己と情動の発達) 大学図書出版, pp.46~55, 総ページ数 158 ページ

#### 6. 研究組織

- (1) 研究分担者

なし

- (2) 研究協力者

浜崎 隆司 (HAMAZAKI, Takashi)

鳴門教育大学

飯牟礼 悦子 (IIMURE, Etsuko)

大東文化大学

加藤 孝士 (KATO, Takashi)

長野県立大学

利根川 明子 (TONEGAWA, Akiko)

東京大学大学院教育学研究科

ほか、長期に渡る研究に参加くださった園児さんと保護者の皆様、調査園・小学校の先生方、逐語録作成から研究成果発表に至る過程において様々な形でご助言、そしてサポートをいただいた学内外の皆様、全てのお名前を記すことはできませんが、ここに深く感謝いたします。

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。